

ある相談から思うこと

県教育庁人権教育・生徒指導課長

高山 公彦



知り合いの保育士のM先生から相談を受けることがあった。彼女は保育士3年目。2歳児のSちゃんへのかかわりに悩んでいた。なかなか思いが伝わらず、いろいろな方法を試すも、叱ることばかりが増えていく。反発するのを必死で抑えようと、あざや小さな傷が絶えない毎日……。朝になってその子のことを考えると、保育園への足取りが重い、そんな相談だった。私はただうなずきながら話を聴くことしかできなかつたが、それでも何度か相談してきてくれた。

年度末が近づいてきたある日、彼女が嬉しそうに話をしてきた。今日、Sちゃんが「M先生がいいの！」と大きな声で叫んだらしい。長い時間がかかったが、彼女の日々の格闘が少し報われた一瞬だったのだろう。私は「よかったな」と彼女をねぎらった。

この話を聞いたとき、私は自分が教師になりたての頃、先輩からかけられた一言を思い出した。「教師が損得を考えたら、教師じゃなくなるで。100回声をかけて、99回心に届かなくても、1回でも心に届いたらそれでえん

よ。そういうもんよ教師って」。子どもがいくら反発しようが、いつまでたつても何も変わらないように見えようが、声をかけ、かわり続けたM先生を私は尊敬している。

以前、AI社会の到来で消える職業が話題となったが、消えない職業には人の心に寄り添う仕事が多く、人を支えるのは人だと改めて感じる。また、仕事の関係で不登校を経験した方やヤングケアラーの経験のある方の話を聞く機会をいただいたが、共通していたのは、心のよりどころとなった教師がそばにいたことだった。

ある自治体では、AIを用いて過去にあったいじめ事案の分析を基に、効果的ないじめへの対応を探る研究を始めているらしい。そうした先進的な研究に期待するところは大きいですが、一方で手法に頼りすぎることなく、一歩ずつ強い信頼関係を築いていくことの大切さを忘れてはいけなく強く感じる。たとえ無駄に思えようと、時間がかかろうと、子どもに一つ届くまで声をかけ、かわり続ける、学校はそんな場所であり続けてほしい。